

「両」制度の崩壊——幕末の金流出

東京大学大学院経済学研究科教授 武田晴人

一八五八年に日本初の通商条約「安政の五カ国条約」が締結されてから、一五〇余年。同条約とそれに基づく翌年の開港により、海外の銀貨と引き替えに大量の金貨が流出し、わが国の貨幣制度は大きな変質を余儀なくされました。今回は、日本経済史が専門の武田先生に、幕末において「両」制度がどのような経緯を経て崩壊していったのかをご説明いただきました。

監修／東京大学大学院総合文化研究科准教授 桜井英治

外国の通貨との出会い

私たちが外国旅行に際して外貨に両替するのは日常の出来事で、交換できない心配をすることもありません。変動相場制のために為替レートに一喜一憂することはあっても、そのレートはあらかじめ知ることができます。しかし、一五〇年前、日本が長い鎖国を解いて外国との貿易を始めようとしたときには、そうした常識は通用しませんでした。国内通貨とドルとの交換比率を決めることは貿易の開始に不可欠の条件でした。そして、この取り決めにおいてアメ

リカが主張するやり方を強引に押し付けられたことが、巨額の金貨流出を招き、幕末の経済的な混乱を激しいものになりました。

金流出の理由

開港時の条約交渉では、外国通貨との交換比率は「同種同量」の原則に基づくことが最終的に合意されました。当初の和親条約では洋銀一ドルは一分銀と等価とされていた。当時国際市場において洋銀一ドルで買える金の重量は、小判一両に含まれる金の約四分の一で（一両＝四ドル）、しかも江戸幕府の通貨制度からいうと

一両は一分銀四枚と等価でしたから、これは理に適った取り決めでした。ところが、ハリスは、国際市場では一分銀に含まれる銀素材の価値が三分の一ドル分しかないとを基準にして銀貨同士の交換比率を決めるように改めることを主張しました。金に換算するのでなく、あくまでも含まれる銀を基準にしようというのが同種同量の



あらためさん さん
「改三分定」と極印が打たれた洋銀（メキシコ・ドル）（貨幣博物館所蔵）。ハリスの勧告を受け入れ、幕府は洋銀に「改三分定」の極印を打つことで洋銀1枚を一分銀3枚で国内に通用させることを認めた。

【貨幣に関する条項の要旨】

1. すべての外国貨幣は日本において流通し、同種類の日本貨幣の同量を以て通用すること。
2. 両国人は支払いに日本および外国の貨幣を自由に用いてよいこと。
3. 日本人が外国貨幣に慣れるまで時間を要するであろうため、開港後1年間は日本政府がアメリカ人の持っている貨幣と引替に日本貨幣を渡すこと。
4. 銅銭を除く日本貨幣および外国金銀を日本より輸出できること。

江戸幕府が米蘭露英仏の五カ国との間に締結した修好通商条約は不平等条約として知られているが、貨幣についても同様だった。

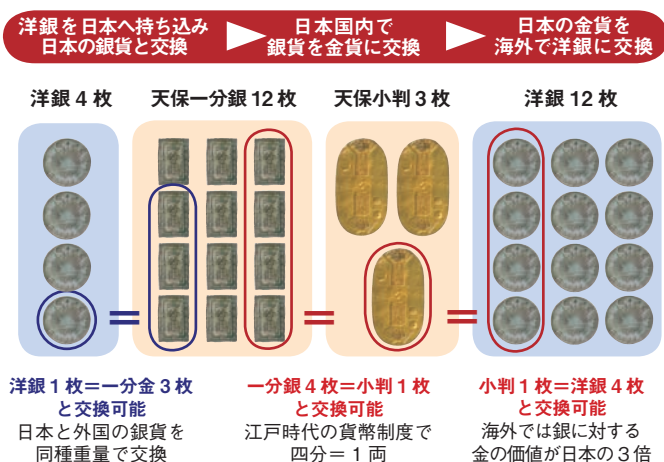
近世から現代までの経済現象を多角的に研究されている日本経済史が専門の東京大学大学院経済学研究科教授武田晴人先生。経済学博士。著書に『日本人の経済観念』『談合の経済学』仕事と日本人』など多数。



錦絵「マケロメケヌ書賣大会戦」(一恵斎芳幾画、貨幣博物館所蔵)。一八五九(安政六)年の開港後の国内物価の高騰を、小判を大将とする貨幣軍と米俵を大将とする商品群の戦い(値段を負けろ、負けぬの戦)として描いている。右端には洋装の外国貨幣や三種類の寛永通宝が描かれているなど、当時の複雑な貨幣事情がうかがわれる。



図表1 金貨流出の図式
——洋銀を4枚から12枚に増やすことのできるカラクリ



意味です。銀貨では含有量と貨幣重量がほとんど変わりませんから、実際には洋銀一ドル貨と二分銀との交換数量が決まっています。こうした基準が採られた理由は、これ以外に通貨価値の標準を求めようがなかったからです。しかし、これは本位貨幣にだけ適用されるものです。国際的には当時は金も銀もそれぞれに本位貨幣で、アジアの貿易取引に使われているのは銀貨でしたから(アジア市場の本位)、銀貨の交換比率を基準にし

ようとなりました。これに対して日本では銀貨が計数貨幣として発行されるようになった後は金を本位貨幣とする通貨制度で、一分銀は国内市場の素材価値でみても約二倍で通用する実質的な補助貨幣ですから、補助貨幣の銀貨にこの原則の適用は不合理なのです。日本側は抵抗を試みますが、結局押し切られてしまいます。こうして銀貨の交換比率は一分銀三枚と洋銀一ドルとの交換になります。ハリスの強引さの前に道理が引つ込められたことになりました。

その結果、洋銀四ドルを金貨換算で計算するとすでに説明したように小判一両と等しく、四枚の一分銀と等価になります。しかし、銀換算では洋銀四ドルは一分銀一二枚相当になり、金貨で計算した場合の三倍となります。

この金銀比価の差を利用したからくりにより、図表1のように洋銀と交換で金貨を日本で手に入れて海外に持ち出し、これを銀と交換する取引を繰り返すだけで、莫大な利益が外国商人たちの手に転がり込むことになりました。それが金流出の原因でした。

貿易と物価

この金流出の経済的影響を物価変動から考えてみましょう。図表2は、開港前後の主要物価の対前年増減率を示したものです。かなり激しい変動を示しています。ここには貿易開始による変化と、金貨流出によって生じた変化とが重なっています。

図表2を丁寧に見ると、その二つの要因を区別することができません。貿易が始まって輸出需要が拡大した生糸・絹製品は一八五八年の開港直後から値上がりが目立ち

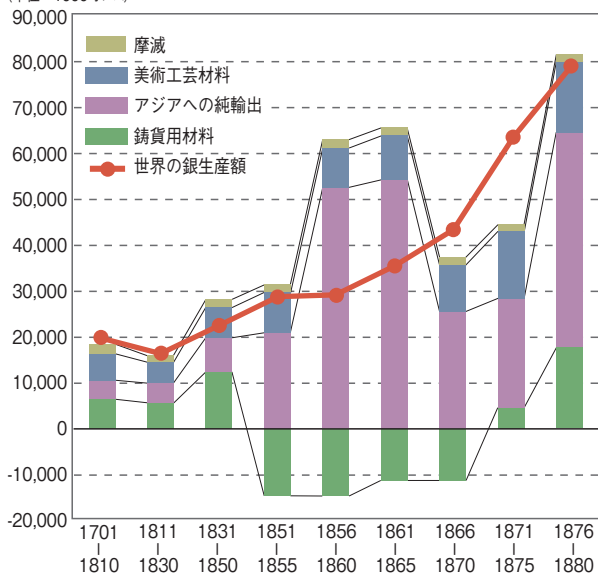
図表2 諸物価の対前年上昇率

	金相場	米1石	繰り綿	木綿糸	白木綿	絹糸	秩父絹
1857	1.6%	14.8%	13.8%	▲3.3%	14.9%	2.8%	14.3%
1858	1.9%	31.0%	20.2%	0.0%	▲13.6%	5.6%	56.5%
1859	0.7%	▲1.0%	5.5%	▲5.0%	▲1.5%	21.1%	28.1%
1860	0.0%	26.0%	15.6%	15.1%	14.5%	35.7%	2.4%
1861	▲0.8%	▲1.8%	25.9%	3.9%	▲4.7%	2.5%	15.0%
1862	3.1%	▲1.9%	▲4.5%	16.4%	4.3%	0.5%	7.2%
1863	12.8%	11.3%	6.3%	40.1%	42.1%	31.6%	15.4%
1864	6.0%	23.1%	45.3%	43.7%	43.4%	47.6%	42.9%
1865	12.8%	72.1%	59.0%	41.2%	34.9%	21.0%	▲1.3%

安藤良雄編『近代日本経済史要覧』より作成。

図表3 先進国の銀消費推計と世界の銀生産

(単位：1000オンス)



開港前日、幕府は金貨流出を防ぐため洋銀との交換用に「安政二朱銀」を発行。同種同量の原則により、洋銀1ドル＝安政二朱銀2枚(＝一分)とし、日本の金銀比価を海外に近づけようと調整を図るも、外国商人らに受け取りを忌避され間もなく通用停止となった(貨幣博物館所蔵)。



ます。これに対して輸入品であった綿製品は同じ時期に値下がりしています。貿易の影響は輸出品の値上がりと輸入品の値下がりという自然な結果を示しています。開港の衝撃が相対価格の変化を通して産業構造を変えていく外圧になったことがわかります。

ところが、金貨流出が始まる五九年から翌六〇年になると綿製

品の価格も上昇し始めます。そして六〇年に海外との金銀比価を調整した金貨の発行を経て六一年には、いったん物価は安定に向かったようです。その後短い小康状態を経て六三年から明治維新にかけて激しいインフレが襲います。正確には詳しい分析が必要ですが、六一〜六二年に沈静化したことを重視すれば、金貨流出の影響は一時的なものにとどまったようです。幕末最後の数年間のインフレは、金貨流出を抑えるために万延二分金などが発行されたことに加え、内戦状態の下で幕府財政が急膨張したためと考えられます。この通貨価値の著しい低下を通して幕藩体制の通貨制度は崩壊に向かうことになりました。

なぜ金銀比価は乖離したのか

ところで、なぜ日本国内の金銀比価が国際市場の動向とは乖離したのでしょうか。

一世紀後半には国内の金銀比価は一对五くらいといわれていますが、これだけから日本は外国とは違うのかと早合点はできません。

鎖国していたからという答えも間違いではありませんが、十分ではありません。江戸幕府成立期まで日本は東アジアで活発な貿易取引を展開していました。ラフな推計ですが、一六世紀から一七世紀前半にかけて一对二三の水準に、日本を含めたアジアでは金銀比価が平準化しています。また、ロンドン銀塊相場は一七世紀半ばから約二〇〇年にわたって一对一五前後の水準で安定しています。つまり、一七世紀初めに内外の金銀比価に大きな差はなかったのです。

海外相場が安定していたのですから、金銀比価乖離の理由は日本側にあります。鎖国による貿易の制限の下で海外相場と遮断されたことに加えて、国内の金銀比価を変化させた要因があったはずですから。すぐ思い付くのは、江戸幕府が財政逼迫を背景に改鑄を繰り返したことです。しかし、江戸時代前半期の銀貨は秤量貨幣でした。金貨一両に含まれる金の量が少なくなれば、それに対応して金貨一両と交換するのに必要な銀の重量も少なくなっただけです。

万延元年(1860年)、1両当たりの純金量を1/3近く減らし小型・軽量化した万延小判を発行した(貨幣博物館所蔵)。



天保小判(1837年)
縦60mm×横32mm
重量11.3g 品位57%



万延小判(1860年)
縦36mm×横20mm
重量3.3g 品位57%

一七三六年に鑄造された元文小判の金量は八・六二gでした。これを一七世紀はじめの一对二三で計算すると銀一一二g相当になります。少し後になりますが、一七七〇年代の銀相場は金一両について一〇三・五gです。一割弱くらいは悪鑄の影響で銀高になっていますが、元文小判の金量は慶長小判の五六%ですから、むしろ金銀比価を維持するように市場の自然な調整が行われていたといえるべきでしょう。

乖離が大きくなった理由は、金貨の改鑄ではなく、計数貨幣として二朱銀や一分銀を発行するとき含有銀量を大幅に減量したからです。最初の計数貨幣とされる南なな鐐二朱銀では四割近く銀量を減

【参考】貨幣史の流れ——幕末のインフレーション

西暦	将軍	日 本	世 界
1850	江戸 安政	【家定】 1853 ペリー浦賀に来航 1854 日米和親条約 【家茂】 1858 米蘭露英仏と修好通商条約締結 貨幣の同種同量交換を協定 安政の大獄（～1859） 1859.6.1 安政小判・一分金・二朱銀発行 6.2 横浜・長崎・箱館開港 外国人に洋銀と二朱銀の交換開始 6.22 外国側の抗議により1ドル銀貨を一分銀3枚に替えることを約す→ 金貨大量流出 8.11 安政小判・一分金・二朱銀製造停止 11.24 ハリス、幕府に金銀比価是正と「極印付洋銀」流通方を文書で勧告 12.28 洋銀「改三分定」の流通を布達	1849 米、ゴールドラッシュ（～1880） 1853 米、補助貨鑄造法（事実上の金本位制）
1860	万延 文久 元治 慶応	1860.1.20 直増通用令により金価格釣り上げ 3月 桜田門外の変 閏 3.27 万延大判製造 4.10 万延小判・一分金・二分金・二朱金の通用開始（＝金銀比価が外国と同様となる）→ 金貨流出が収束に向かう 5月 極印打洋銀「改三分定」廃止（自由流通）寛永通宝四文銭（鉄銭）製造 1863 文久永宝四文銭（銅銭）製造 *この頃、物価上昇や社会不安により世直し一揆や打ちこわしが頻発 1867.5月 兵庫開港勅許 8月 幕府金札「江戸横浜通用金札」発行「ええじゃないか」おこる（～1868） 10.14 大政奉還 12月 幕府金札「江戸及関八州通用金札」兵庫開港金札」発行 12.9 王政復古の大号令 政府「太政官札」発行 銀目廃止令	1860 露、国立銀行設立 1860 スイス、金本位制採用（仏幣制採用） 1861 米、南北戦争（～1865） 1862 米、合衆国紙幣 1863 米、国法銀行制度 1867 仏、パリ国際通貨会議（金本位制の国際化に寄与）
	明治		

鎖国をしいていた江戸時代のわが国では、江戸末期に向けて金銀比価が国際相場（1対15）から大きく乖離し1対5程度にまで銀高が進んだ。金銀比価の国際相場からの乖離は、鎖国が行われている間は内外の金融市場の遮断によって可能となっていたが、安政6（1859）年の開港とともに、大規模な金貨流出が始まった。「同種同量の原則」に基づき洋銀（メキシコ・ドル）1枚は、およそ一分銀3枚に相当するとされた。つまり、外国商人は、日本に洋銀を持ち込み、金貨に換えて海外へ持ち去り、例えば上海で再び洋銀に替えれば約3倍の銀貨を得ることができ多額の利益を上げられたのである。その流出量は、半年間で10万両とも50万両とも言われている。

こうした金貨流出を防止するため、まず安政7（1860）年1月、幕府は天保・安政小判の銀貨に対する価値を約3倍に引き上げる「直増通用令」を発した上で、万延元（1860）年4月には、1両当たりの純金量を1/3に減らした万延小判を発行した。この結果、国内の金銀比価は国際基準によりやく平準化し、金貨流出は収束に向かったいった。

その一方で、開港以降の幕末期、これらの改鑄の影響に加え、内戦状態の政治・社会的混乱のなかで物価が急騰し、激しいインフレーションに見舞われたのである。

銀本位のアジア世界

この幕が下りようとするちやうど同じ時期に、世界では大きなドラマが始まろうとしていました。

図表3は欧米先進国で銀がどの

らしたために、含有量で金貨と銀貨の重量比を見るとおよそ一対八・八となりました。そして、この比率は天保一分銀では一対四・五となります。天保小判には六・四gの金が含まれていますから、本位貨幣として金銀比価が維持されていれは約八〇gの銀の含有が必要ですが、実際には三四・五gと半分以下でした。これが銀貨を計数貨幣として鑄造し、補助貨幣化するメリットでもありました。比価が乖離した理由はこのように銀貨を計数貨幣に変えた江戸幕府の政策の結果でもあったのです。

幕府財政の延命策として採られてきた通貨改鑄による財源確保は、開港による衝撃の下で、積年のやりくりのツケを一挙に表面化させ、日本を経済的な混乱に陥れることになりました。こうして幕藩体制は終幕を迎えることになりました。

アジアへの激しい銀の流れは、ヨーロッパで銀貨が本位貨幣として不要になったことで加速され、あれほど長いこと安定していた金銀比価を、一九世紀の最後の四半世紀に一对三四～三五という急激な銀安へと導いていく序曲となりました。日本からの金貨流出は、こうした世界の動きの中では、金貨を本位貨幣としていた日本の通貨制度の根幹を揺るがし、事実上の銀本位制度に追い込んでいきました。金本位制度への確立まで、それから三〇年以上の年月を要したのです。